山梨県埋蔵文化財センター
YAMANASHI Pref ARCHAEOLOGICAL Cultural Properties Center

埋文やまなし

2012. 2. 23（富士山の日！）
第40号
http://www.pref.yamanashi.jp/maizou-bnk/index.html

特集　富士山への信仰

童謡「ふじの山」に歌われるように、富士山は日本で一番高い山として親しまれています。雄大で美しいその姿は、古くから信仰の対象として人々の関心を集めてきました。

当センターでは、平成21～23年度の3年間で、富士山信仰遺跡に関わる調査を行なってきました。今回の埋文やまなしでは、この調査成果について紹介したいと思います。

富士山信仰の宝物（ふじさんしんこうのほうもつ）

うんぎょう
吽形

あぎょう
阿形

☆高さ約19㎝、阿像は下部が欠損

※'阿吽（あうん）の呼吸'の阿と吽です。
口を開けているのが'阿'閉じているのが'吽'です。

経筒

経巻

陶製こま犬 阿形・吽形（河口浅間神社所蔵）

河口浅間神社は、富士山の貞観6年（864）の大噴火をきっかけに、噴火を鎮めるために造られた神社とも伝えられており、富士河口湖町河口の地に鎮座しています。

この神社に伝わるこま犬（上写真）は、その特徴から室町時代につくられたものと考えられます。中世の陶製こま犬は、生産地である瀬戸美濃地域の他にごく少数ではありますが、関東や関西地方にも伝わっています。中には熊野の行者の名前が墨書されたものもあり、一説によると山岳信仰に関わる山伏が厨子に入れて持ち歩き、社寺に納めたとも言われます。関東では、香取神宮（千葉県）や鹿島神宮（茨城県）にも伝えられています。

この河口浅間神社のこま犬は、東京都八丈島の優婆夷（うばい）神社から出土したものとよく似ています。これらこま犬の分布により山岳信仰者の足取りが浮かび上がるかも知れません。

伝経ヶ岳出土経筒・経巻（塩谷家所有）

吉田口登山道の五合五勺にある経ヶ岳で大正13年に発見された経筒と伝えられており、平安時代後期のものと考えられています。現状で高さ21.6㎝、口径13㎝ほどの経筒に、10巻の経巻が納められていました。経巻のうち、ひとつが開かれていますが、法華経三部経の結経（結びとなる経）と判明しています。

◀経巻のうち、2巻には、竹に似た植物質の軸が残されていました。

冨士御室浅間神社里宮で見つかった地鎮の品々（富士河口湖町）

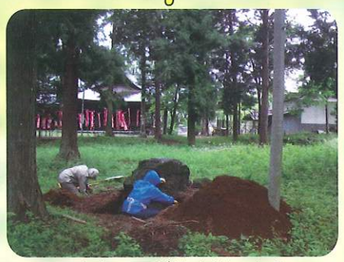
こんなものも見つかっています！

富士山二合目のところで紹介した、冨士御室浅間神社には、里宮も存在します。二合目では祭事に不便なことから、天徳2年（958）に村上天皇により創建されたと伝わる神社で、河口湖の南岸に鎮座します。

ここでは、この里宮から発見されたものについて紹介します！

この里宮、『甲斐国志草稿』によると、かつては河口湖を取り巻く地域で広く信仰されていた時期もあったといいます。この里宮の敷地内には'片山社'があります。里宮周辺の地名は'勝山'といいますが、'カタヤマ'はこの'カツヤマ'の昔の地名だったと言われています。このことから片山社は、この一帯の産土神と考えられます。'片山社'は近年、里宮本殿の裏に移され、その土台だけが残されていましたが、実はこの土台の中には、水晶、墨書された石、剣形鉄製品が納められていました。墨書石には『一切神力』、朱書石には『宇賀　大辨財天　八神』と記されています。これらは社を置くにあたっての地鎮の際に納められた品々だと考えられます。

社自体の調査がなされる事はめったにないため、今回の調査は貴重な成果となりました。



▲中央の石が片山社の土台。画面奥は里宮拝殿。

▲納められていた品々。

▲土台。中央に四角い孔が見えます。

▲孔の中。水晶や墨書された石が入れられています。

▲一番底には剣形鉄製品が納められていました。

▲墨書石　▲朱書石

埋文センターからのお知らせ

今回の調査で出土したものも見られます！

下半期遺跡調査発表
日時：平成24年3月17日（土）
場所：帝京大学山梨文化財研究所

山梨の遺跡展2012
会期：平成24年3月10日（土）～4月8日（日）
場所：山梨県立考古博物館

編集後記

あたたかい春の訪れが待ち遠しい季節となりました。

今回は「富士山への信仰」と題して、山梨県内山岳信仰遺跡分布調査の成果について紹介しました。

富士山の世界遺産登録に向けては、大詰めの作業を迎えているところですが、今回の調査成果に触れ、富士山やその信仰の歴史に少しでも興味をもっていただければ幸いに思います。

山梨県埋蔵文化財センター
埋文やまなし　第40号
発行日：2012年2月23日
編　集：山梨県埋蔵文化財センター
発　行：〒400-1508
山梨県甲府市下曽根町923
TEL　055-266-3016
印　刷：（株）峡南堂印刷所
写真提供：やまなし観光推進機構

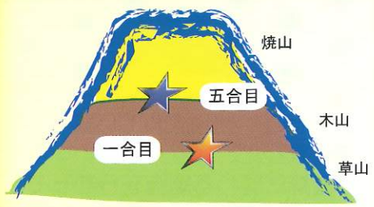
発掘調査の成果

平成21年度～23年度までの3年間で調査した場所は12箇所ですが、その場所は富士山の山の中から、関連神社の境内地、足和田山中、御坂山中など様々です。今回は富士山中での調査について紹介します！

▲五合目の旧道沿いで発見された石碑

富士山五合目の森から昔のお金が…（富士吉田市）

五合目ってどんなところ？



植生の違いで見た場合、富士山は下から「草山」「木山」「焼山」の3つに分けられていますが、その境にあたるのが、‘一合目’と‘五合目’です。この一合目と五合目は、信仰世界にとっても大きなポイントとなる場所で、それぞれには、富士山の神様である「浅間明神」の本地仏である「大日如来」が祀られていました。五合目付近には、かつて大日社・浅間社・稲荷社の3社が祀られていました。この付近は古くは‘中宮’と呼ばれ、富士山中の役銭場のひとつである「中宮役場」が置かれていました。

一合目鈴原社の「大日如来坐像」。室町時代末ころの制作と考えられます。

中宮（五合目）の小屋

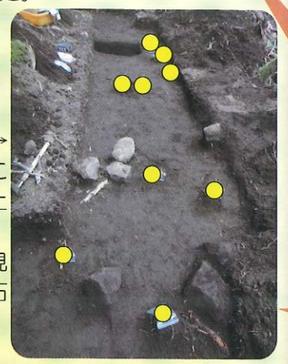
五合目周辺には、戦国時代にはすでに鐚銭改めのための小屋があったものと考えられています。また、山梨県側の富士山中の信仰世界を描いた『八葉九尊図』（延宝8年（1680））には、「こやかす十八間」と記されています。

五合目は「天地境」であり、それ以上は神聖な場所であると考えられてきたため、商小屋を建てることができず、御来光を拝む参詣者の宿泊施設として、ここに小屋が集中したものと考えられます。江戸時代中期以降は、信仰観の変化により、五合目周辺にあった小屋はより上へと移ったものと考えられます。

調査でわかったこと

右下の図の破線で囲んだ大きい方の丸内に白くウロコ状に見えるのが、小さな平坦地の集合です。この、赤色立体図という地形図の観察により、一帯に小さな段々があることがわかり、調査を行うことになりました。

←礎石と考えられる石が見つかった様子。この平坦地からは、銭貨は1枚も見つかりませんでした。


銭貨が出土したところ→
○印のところから見つかりました。この平坦地で10枚あまりの銭貨が出土しました。鉄銭1点を除いては全て渡来銭でした。その他、火打ち石も見つかっています。この平坦地には礎石は残されていませんでした。

このように、このヒナ段状の地形には、礎石や銭貨が残されていることがわかりました。おそらくは、この場所が中宮小屋にあたる場所と考えられます。出土状況から、礎石がある平坦地は小屋がある場所、銭貨が出土した平坦地は作業スペースなどとして使われていた可能性もあります。

富士山中の一大信仰拠点、二合目（富士河口湖町）

二合目ってどんなところ？

富士山二合目には、富士御室浅間神社本宮が鎮座しており、この社有地は富士河口湖町の飛び地となっています。神社は大同2年（807）創建の富士山中で最も古い神社と伝えられています。本殿は昭和49年に河口湖南岸の里宮に移され、現在二合目には拝殿が残されています。

『富士山明細図』に見る二合目本宮

現在、本殿はありませんが、今でも景観は、この江戸時代おわり頃の様子とそれほどかわりありません。

『富士山明細図』は、川口十二坊 御師二十七代 本庄元直氏所蔵

調査でわかったこと

今回は、この神社周辺の調査を行ないました。調査の結果、

①現在拝殿が建つ平坦地の裏側には旧道が巡っており、道々の平坦地から銭貨を発見！

②神社に至る旧道沿いで、富士講の石碑を発見！

③神社下の旧道で、12世紀後半の山茶碗片を発見！

この時期は、昔神社に伝えられていたという2体の神像の銘にある文治5年（1189）・建久3年（1192）に近く、また境内で出土した炭化木についてC14年代測定により割り出したところ、西暦1100～1200年くらいの時期に炭化したという年代がでています。

これらの成果により、現在は山林となっている神社周辺も、かつては信仰の道として人々が通っていた時期があったことや、この二合目には遅くとも12世紀後半には信仰目的の人々が入ってきたということがはっきりとしました。

『富士山明細図』に見る定善（禅）院跡周辺

絵図中に描かれた岩と考えられる場所から、石碑を発見！

二合目本宮社有地から出土した銭貨

寛政8年（1792）に、富士講のひとつである‘山包講’の講祖的存在である江戸麻布の‘包市郎兵衛’と御師である富士吉田の‘外川能登守’がともに、御中道巡り（五合目付近を横に一回りする修行）が無事成功しますように…という願いを込めてつくった碑です。